岐阜新聞真学塾

出題　蛍雪ゼミナール

長良北校・築樋拓真

国語を様々な側面からみて、日本語の面白さや深さを知ってもらえればと思います。

問題【国語】

以下の文は枕草子の中で、面白くないことを紹介している節の一部です。現代語訳してみましょう。

人の国よりおこせたる文の、物なき。

地方からよこしたる手紙で品物が添えてないもの

【解答】

豆知識 雑学コラム

仮名遣いの変化

今回は古文についてです。古文の時代と現代で、日本語は大きく変化しています。変化の一つに「ののしる」を「大声を出す」と訳すように意味の変化が上げられます。そして、もう一つは現代仮名遣いの「思う」を、歴史的仮名遣いで「思ふ」と書くように仮名遣いの変化を連想するかと思います。

なぜ、仮名遣いは変化したのでしょうか？　これは平安時代には実際ひらがな通り「思ふ」と発音していたものを、時代とともに「ふ」を「う」と発音するようになったためです。つまり、歴史的仮名遣いと現代仮名遣いの違いが生まれたのは音の変化があったからというわけなのです。

学校の歴史的仮名遣いの授業では「ふ」は「う」に直すというように古文の時代から現代にいたる間の音の変化についての規則を学びます。しかし、この音の変化には規則にのっとっていないものもあります。その一例を見てみましょう。

今回の問題文の「おこす」ですが、これは現代語訳では「よこす」となります。つまり、「おこせたる文」とは「よこしてきた手紙」という意味になります。これは「おこす」の「お」が時代とともに「よ」に変化したというわけです。この音の変化は規則的なものではないため、例外として覚えておきましょう。

岐阜県の公立高校の入試では、規則的な音の変化である歴史的仮名遣いがよく出てきます。規則をしっかり覚えて本番に臨むようにしましょう。